保護者の心配

「うちの子……」にどうこたえる？

友達との関係や集団における振る舞いなど、我が子の姿に心配を募らせる保護者たち。保育者としては、0～5歳児の社会性の育ちをふまえて、子ども理解と保育への信頼を育んでいきたい！前ページで実践エピソードを紹介した明徳土気こども園の先生たちに話を聞きました。

お話を聞いたのは…

龍 孝幸さん
副園長

夏井裕美さん
主幹保育教諭

育ちの過程とともに、教育的なかかわりも伝える

発達の見通しをもっている保育者とは違い、保護者はその時点までの我が子しか知りません。「友達と一緒にあそんでいないけど大丈夫？」「いつも友達に言い負かされているけど大丈夫？」と心配になるのは当然のこと。園としては、**その子の「いま」と「これから」、いまの姿が育ちの過程であること**を丁寧に伝えます。ただ、保護者がそれを実感できるのは、子どもの成長した姿を目の当たりにしたとき。子どもが育ってから、「先生の言っていたことが分かりました、育ちの途中だったんですね」と言われることが多いような気がします。

育ちの過程とともに伝えたいのは、**園でどのように教育的なかかわりをしているか**ということ。いまの育ちの過程をふまえた保育者のかかわりや、この先に計画している経験の機会など、園で意図的に行っていることについて伝えることも、保護者の理解を得ることにつながります。

「その子らしさ」を大切に

そもそも、保護者が心配している子どもの姿は、その子らしい良さとつながっている部分でもあります。当園では、その子がその子らしく、その子なりの自己肯定感をもって育っていってほしいと願っています。ですから、いちばん大事なのは、**「その子の良さ」を伝えること**。いろいろな情報を見聞きし、近所の子や保護者自身の幼少期と比べて不安になっている保護者もいます。「その子はその子」であることを伝え、どのような育ちの中にあるのか、いかに園で教育的な視点でかかわっているかということを伝えていくようにしています。

イラスト 小迎裕美子

2024.3.1 ほいくあっぷWeb（Gakken）

心配❶ うちの子……

いつも一人であそんで友達がいない？

発達には個人差があるものですが、周りの子が友達とあそび始めている中で「うちの子は一人であそんでいる」となると、心配になるのでしょう。乳児クラスでも、「うちの子は友達とあそべない」「友達のおもちゃを取ってしまう」と心配になっている保護者はいます。いずれの場合も、**まずは「自分」から始まること、自分のあそびから始まること**など、育ちの過程を丁寧に伝えます。また、**友達と緒にあそぶことがすべてではなく、「自分の世界」があることは良いこと**で、園では一人あそびも大事にしていることなどもあわせて伝えていきます。例えば、みんなが鬼ごっこをしている中、園庭の隅で木の皮をはぐのに夢中になっている子がいたとしたら、**おもしろいことを見つけられるその子の良さに注目して保護者と共有**したいと思います。その上で、**その子も参加するような全体のあそびや活動を設けていること**など、常に一人ではないことも伝えていきます。

心配❷ うちの子……

意見が強すぎて友達に嫌われていない？

4〜5歳児では、しっかり者でリーダー的存在の子どもについて、逆に心配という保護者も少なくありません。たしかにその時点で見ると、その子の意見が強くて周りの子が付き従っているな……ということもあるのですが、だからといってその子の意見を抑えたり、均質化させようとしたりはしません。なぜなら、**その子のその姿は、自分の意見をみんなの前で堂々と言える、周りを引っ張っていく力があるという、リーダーとしての才覚の表れ。伸ばしていってあげたい「その子の良さ」であること**を伝えつつ、**この先、いろいろな活動がある中で、思い通りにならない経験をしたり、相手の気持ちに気がついたりしていくだろうという見通し**も伝えます。必ずではありませんが、意見がはっきり言える子同士、意見をあまり言わない子同士のグループ編成を、年度途中に意図的に組むこともあります。

どの子も、いろいろな人と出会い、いろいろな経験ができるように、葛藤する機会があるように、保育の内容を考えていることをしっかりと伝えていきます。

心配❸ うちの子……

仲間外れにされている？

友達同士のかかわりが出てくると、「いじめられている」「意地悪されている」という相談が出てきます。でもそれは、**社会性の育ちの過程の中で、自分の思いを発揮できるようになってきたからこその姿である**ことがほとんど。友達関係のいざこざが出てくる時期には保護者会などでも話をしてはいますが、我が子を心配する保護者の気持ちとしては、なかなかすぐには安心できない部分でもあります。

実際に子どもたちの様子を見ると分かることも多いのですが、コロナ禍においては、保護者が園の様子を見る機会が激減してしまいました。保護者と保育者が立ち話をする機会も減り、その間はノートのやり取りを強化しましたが、「少し気になる」ときに話せず、心配が大きくなってしまったケースも。個別に相談できる機会の必要性を感じ、昨年からは個人面談の回数を増やしました。そうした機会を利用して、子どもたちの姿を丁寧に説明します。「仲間に入れようとしない」相手にも、それまでのあそびの積み重ねがあり、意地悪のつもりはないこと、思いは伝えるよう促すが一律に「入れてあげましょう」という指導はしていないこと、でもその子の個性を見ながら仲間に入るきっかけ作りやフォローをしていることなど、**経験を積み重ねて次の姿に移っていけるようにかかわっている**ことを継続的に伝えていきます。

うちの子らしさ
その子らしさを
共有しよう〜